
インドア天使

オレンジ君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インドア天使

【NZコード】

NZ802W

【作者名】

オレンジ君

【あらすじ】

私、松葉 真里亞はある日突然、天使になりました。飛べない天使はただの人！？こんなダメ天使の隣人はエルフ！？マンショングとゲームの中に飛ばされ、住人がファンタジーに！？この先どうすれば良いのかも分からぬ。手探りの生活が今始まります。

プロローグ「とつあえず天使で」（前書き）

2011年9月2日、一部修正。

プロローグ「どうあえず天使で」

今、私は自室でパソコンの前に座っている。これは私の日課だ。毎日大学の講義が終わると友人とのおしゃべりもそこそこにしていますぐに帰宅する。

友人からは付き合いが悪いと言われるけど止められないから仕方が無い。

そう、私の心を挟んで放さないのはオンラインゲームだ。ネット上で不特定多数のプレイヤーがチャットを通して会話、モンスターを倒してレベルアップ、イベントやスキルの獲得、ギルドに入るのも良いだらう。とにかく色々な要素があつて面白いのだ。

そして今日もまた電腦空間と言つ名のダンジョンを冒険するのだ。あ、ちなみに私は引き籠もりではないからね。ちゃんと講義にも出席しているし、友達とも遊ぶ。ただインドア派なだけ。

ちなみに私の名前は松葉 真里亜 まつば まりあ 一人暮らしの大学2年生です。私が住んでいるのは円筒形で18階建のマンション。本来ならちょっと高めの部屋なんだけど市からの補助金で学生だけは安くなっている。そのせいか住民の6割が学生になつちゃつて学生寮みたいな雰囲気だ。

て、そんな事はどうでもいいのよ。今日はサーバーメンテナンスの日だからしばらくいつも私が遊んでいるゲームができるない。やる事がないのでオンラインゲーム紹介サイトを流し見る。そして私はふと“それ”に目をとめる。“それ”には説明文が無い。挿絵も無い。訝しく思い“それ”をクリック。

「え」と何々、THE ABSORPTION OF WORLDへようこそ。えつとこれは世界の吸収つて意味かしら? そこに書かれていたのはこうだ。

“現在運営準備中のためログインできません。ただし、キャラクタークリエイト機能のみ使用可能。”

「なによこれ。アバター作つて待つてろつて事?まったく準備出来てから紹介しなさいよ。えーとキャラクターあつとこれね」

ブツブツ言いつつ、さっそくクリエイト。

「えーと、名前:マリア、性別:女、次は種族ね~」

人間

エルフ

ドワーフ

「うん、このあたりは順当ね」

獣人
鬼人

「鬼人? 獣人は分かるけど、鬼? 魔族とかかな~」

どれもありきたりだと思つていいたらその下にもまだ項目があつた。

先着100名様サービス

「先着? こんな見たことない。何だろ?」

好奇心に任せてクリック! すると、

“おめでとうござります。あなたは99人目のお客様ですので、先

着サービスの該当者となります。

”

「おわつー。がりざりセーフ。どんなサービスだ？」

上記以外の新種族の創造

注・このサービスを受けると初期装備が無くなります。

「初期装備が無くなるのかー。でもまあ、自分で種族を創るのは面白そうかな」

考える事、5分。

「ん~何にしよう。こぞ決めると言われても。上の選択肢に無かつたやつで良さそうなやつは…………」

しばらく考えた末。

「とりあえず天使で」

種族を決めた後は特に何も無くクリエイト完了。そのころにはメントナンスも終了していたので、いつものゲームにログイン。何時ものようにパーティ組んで冒険をした。

ログアウトした後に先ほどキャラクタークリエイトをしたサイトを見ておいたが相も変わらず準備中。そんなにすぐ完了するとは思つていないのでそのまま消灯。

その後、翌日もその翌日も何も変わらず準備中。ついには一ヶ月も経過し、そのころには真里亞もそのゲームの存在さえ忘れかけていた。

しかし、事件が起きたのはちょうどそのころだ。いつものように冒険しログアウト、宿題のレポートも済ませベッドに入る。いつも通りだ。しかし日常が続くのはその夜までだった。

翌朝、視界に入るのはいつも天井だ。しかし何か違和感がある。天井ではない、自分にだ。布団をめくるとそこにはすっぽんぽんの自分がいた。

思いもよらない事に絶句する。

「何！？」

一瞬固まるがすぐに再起動する。

「昨日はたしかにパジャマを着てたんだけどな、寝相で脱いだのかな？でもこんな事今まで無かつたし、変質者！？はあり得ないし」

首をかしげながらタンスから服を取り出す。来ていた服が突如消えるという怪奇現象に遭遇したことに多少ビクビクしながらも空気を入れ替えるためにカーテンと窓を開けた時、本日2度目の絶句が待っていた。

窓の外は森林だった。しかも幹の直径が車くらいある大木である。高さもおかしい。

ちなみに真里亜の部屋は15階にある。そのベランダと木のつりペんが同じ高さにあるのだ。

「嘘でしょう……」

あまりの事態に茫然と立ちつくしてしまう。直後、部屋のインター

ホンが突如鳴り響き猫の様に飛び跳ねてしまつ。恐る恐るモニターを覗き込むとそこにはエルフが立っていた。

第1話「となりのエルフ」

インター ホン の モニター の 向こう に まだ 真っ白 で 見ても エルフ に しか 見
え ない 人 が 立つ て いた。

エルフ なん て 生 で 見た こと ない けど
その エルフ は 顔 の 側面 に 先 の どがつた 長い 耳、 人間 と は 違う 細く 锐
い 顔 の 輪郭、 あと 金髪 ね。 それ と 着て いる 服 も 見た 事 が ない。
どこ か 民族 衣装 を 思わせる もの で、 まさしく ゲーム 内 で エルフ が 着
る 様な 服装 だ。

そんな エルフ が 何 の 用? て 言つ か 何 で インター ホン 使 える の?
とりあえず、 応答 し て みよ う。 危険 な 奴 なら 開け なきや いい だけだ
し。 現代 の 防犯 設備 な める な と 言 いた い。

「 もしもし 」

恐々 話 しかける。 すると、

『 あの、 真里亜さん です よ ね 』

向こう も 恐々 話 しかけ て きた。 ちょっと 待て。 なぜ 知 つ て いる。 表
札 に は 名字 しか 書いて い ない の に。
私 が 驚き 硬直 して いる と、

『 僕 です よ。 竹山 たけやま 聖 ひじり です。 こ んな 姿 で 分から ない と 思 い ます けど 』

え? 聖君? 聖君 とい う と 隣 に 住ん で いる 高校 一 年生 の 男 の 子 の 名前
だ。
たしかに 言わ れてみると 声 が まつたく 同じ だ。

「 本当に 聖君 なの? 」

『はい、朝起きたらこんな姿になつてまして』

話し方も私の知る彼の口調と同じだ。どうやらモニター越しのエルフは本当に聖君のようだ。すぐに玄関に向かい扉を開ける。するとそこにはモニターで見たエルフが少し緊張した様な表情で立つていた。

「あ、あの真里亞さんですよね？」

訪ねておいで、さなりこの質問。

「それは私が貴方にする質問じゃない？」

「あの……鏡見ましたか？」

「鏡？まだ見てないけど」

「だったらすぐ見た方がいいですよ」

失礼な。寝起きだからって誰だか分からぬ程酷い顔じゃないと思うんだけど。

そう思いつつも洗面所に向かい、鏡を見る。

「誰？」

そこに映っていたのは、私の知らない銀髪の美女だった。

私が鏡の前で困惑していると、聖君が洗面所に入ってきた。

「やつぱり、気づいてなかつたみたいですね」

「ど、どういう事？何がどうなつてるの？」

「と、とりあえず落ち着いてくださいよ。僕にも何が何だか分からなくて真里亞さんに何か知らないかと聞きに来たんですよ」

聖君を問い合わせるが、どうやら彼も何も知らないらしい。

新たなる謎に茫然としていると、彼が私の頭を見ている事に気づく。

「何? どうかしたの?」

「その頭のあるのは何ですか?」

頭の上? 再び鏡に顔を向けると、さつきは銀髪と姿に全意識を持つていかれていたがよく見ると頭が光っている。正確には頭の上のリングが。俗に天使の輪と呼ばれているものだ。

「くつ?」

天使の輪? なんで? どうして? どうなってんの?

正体を確かめようと、輪に手を伸ばし掴もうとするが。

そのまますり抜けてしまった。なんどやっても掴めない。どうやら実体は無いようだ。

その後、いつまでも洗面所にいるわけにもいかないのでリビングに移動した。

一応言つておくけど、聖君とは付き合つてはいるとかじゃないからね。お隣の好で時々勉強を見てあげているだけ。それとゲーム仲間。よく一緒にパーティを組んだりする。

聖君は今、リビングで私のノートパソコンで何か調べている。私はというと朝食がまだだったので台所で調理中。聖君もまだの様だからついでに作つてあげる。

現状確認は食べながらということで。腹が減つてはなんとかつてね。ん? 電気や水道が使えるのかつて? 答えはイエス。なぜだか使えました。

ちなみにこのマンションはソーラーパネルによる自家発電をしており

り、無理をしなければこのマンションで消費される電力ぐらいならカバーできる。もちろんオール電化。

水も、雨水を屋上にある巨大な貯水タンク（ろ過機能付き）があるから大丈夫だろう。非常用だから4日分くらいしかないけど。さて、朝食もできた事だし食べますか。Pこと睨めっこしている聖君のもとに朝食をもつて行く。

「何か分かった？」

「はい。インターネットはまつたく繋がらないんですけど、これだけは繋がったんですね」

そう言いつとPの画面を私に見えるように動かす。そこにはこう書かれていた。

“THE ABSORPTION OF WORLD”

「これって！」

「あれ？ 真里亜さんも知つてたんですか？」

「うん。えーと、2ヶ月くらい前にキャラクタークリエイトして「僕は1か月前です。その時作ったキャラがこの姿なんですよ」「そうだ思い出した！ どつかで見たことがあると思ったたら、自分で考えたんだ！」

「忘れてたんですか……」

聖が若干呆れた顔で真里亜を見る。

「仕方ないでしょ、2ヵ月も前の事だし、ずっと準備中だつたし「まあ落ち着いてくださいよ。とりあえずご飯にしましょ」というわけで、コーヒー片手に情報整理。

「まず、マンションの周りが大樹林になつていて、私たちの身体が

THE ABSORPTION OF WORLDでキャラクタークリエイトした時の姿になつて……。そういうえばその服どうしたの？」

ふと気になつたので聞いてみる。

「あれ？ 起きた時に着てませんでしたか？」

え？ なにそれ。

「着てないわよ。というか起きた時は全裸だつたし」

そう言つと聖君は私の胸に視線を移し、何か妄想している様な……。

私は聖君の足の甲に思い切りかかとを落とす。

「ぐわああつ！」

「本人の目の前で裸を想像するなんて、いい度胸しているじゃない」

痛みに根絶する彼をフンッとしている。ちなみに私はじカップ。いやそんな事はどうでもよく。どうして私は全裸で、彼はあんな服を……

「あー！」

「どうしたんですか？」

いきなり大声を出した真里亜にびっくりする。

「思い出したわ！ 確か注意事項として初期装備が無くなる様な事が書いてあった」

「な、なんですか初期装備無つて」

「そつか。あの時私で99人目だったから、その1ヶ月後に登録した聖君は知らないんだ」

「何ですか99人目つて」

そして、先着100人限定サービスの説明をする。すると彼は悔しそうに言つた。

「いいな～。僕ももう少し早く登録していればな～。その時点で後1人OKだつたら教えてくれても良かつたのに」

「今はそんな事言つている場合じやないでしょ」

「そうですが。てか、あれ？天使なのに羽は無いんですか？」

「羽？」

言われてみて気づいた。そう、色々と気付いたのだ。

私はバツと立ち上がると聖君に何も言わず自分の部屋に駆け込む。そして急いで着ていた服とブラをとると姿見の前で身体を捻る。すると、ありました。私の背中に天使の羽が。ただし、小さい。それはもう小さく、片翼の大きさで掌てのひらと同じくらい。イメージ的には、ちょうど掌の付け根を合わせたみたいな感じの羽が背中に付いています。どうして言われるまで気づかなかつたのかな？余程動搖していたみたい。言われてみると羽とブラの位置が微妙に重なつていて違和感があつた。試しに動かしてみると、ヒヨコヒヨコ動きます！ちゃんと神経も通つてているみたい。そうやって遊んでいると不意に部屋のドアが開き聖君が入ってきた。

「あの～、どうかしたんですか？」

お分かりだろうか。私の部屋はドアの反対側に姿見がある。私は姿見に背を向けて首を捻っている状態。すると身体の前はドアの方を

向いているわけで、鏡越しに聖君と田が合つたりするわけで。そうなるとやつぱり。

「わやあああああ

私は机の横に置いてあつたゴミ箱を聖君に向かつて全力投球。ゴミ箱は見事顔面に命中。鼻から噴水が出ていたが知つた事ではない。私はすぐにドアを閉め、服を着る。

「あのエロガキ！」

「まつたくもう、次は本氣で投げるからね」

聖君は今、私の横で正座している。私はといつと朝食を片づけ、リビングのソファーの上でPCTと睨めつー。

「あれで本気じゃないんですか

「何か言つた？」

「いえ、何も。お陰様でよりリアルな妄想が出来るようになりました」

バツコーン一 手元に置いた空のゴミ箱で直接殴る。

「『あやあああ、鼻が、鼻が～』

鼻を押さえてのたうち回るが知った事ではない。といつも彼の性格はこんなだった？

思春期なのだから多少は仕方がないかもしれないけど、エルフにはつて拍車がかかつてない？

気を取り直して再びPCに向き直る。どうやら“THE ABSOLUTE POTION OF WORLD”的サイトで所持アイテムやスキルなどの確認ができる、倉庫の代わりになつていていたみたい。

私の倉庫には何もない。聖君に許可をもらい彼の倉庫を確認するとありました、初期武装と思われるものが。ただの弓と矢70本。何の効果も無い初期武装。びっくりしましたよ。PCを通して弓矢が突然目の前に現れるんですよ。それと彼の着ている服は私が着ている服と比べて防御力が高いだけで、特別な効果はないみたい。

もうここまで来れば認めるしかないわね。薄々はそうじゃないかと思ついたけど、これだけ物証を見せられると。

「もしかしながら私達、ゲームの中に入り込んだの？」

「いえ、僕達だけじゃないですよ」

「どういう事？」

「玄関の外を見れば分かると思います」

玄関の外?何があるんだろうと思いつつ、扉を開ける。

このマンションは筒型をしている。簡単に言うと。ドーナツを積み重ねた様な形だ。もちろん中心には中庭があり、空に向かって空洞が続いている。通称ドーナツマンション。某百十の王マンションに対抗して造つたとか。エントランスホールの傍には、ライオ

ンではなくドーナツの像が置いてある。前にも言ったが真里亜の部屋は15階にある。その隣に住む聖も同じだ。何が言いたいのかと云ふと高い位置にあるので下階が良く見渡せるのだ。

今私は下階を見降りし、信じられないモノを見ている。そこには人間に交じつてエルフやドワーフ、犬耳猫耳の人など、いる事があり得ない人たちが到る所で私達と同じように困り顔で話し合っているのだ。

またしても驚愕していると聖君も玄関から出て來た。

「どうやら、ここのは全員がゲームの中に入っているみたいですね

第2話「壇の上のアハコ」（漫畫セ）

2011年9月2日、一部修正。

第2話「塔の上のハナコン」

「なんで……」

思わずそう洩らしてしまった私の眼には、マンション内を歩き回る
亜人達が映っています。

「どうなってるんでしょうか？」

後ろに立つ聖君が私に聞いてくるけど、私にも分からぬ。

「まあ“仲間がいた”って事で少しだけ安心したかな

「だけど、この後どうするんですか。他の人達を見てるかぎりだと
僕らみたく何も知らないみたいですし」

「そうね。このまま2人で考えていてもしょうがないから、不本意
だけどあの人処へ行くわ

「あの人？」

「そう。あの人」

私は家の中から帽子をとつて来るとそれを被り施錠する。

「あれ? どうしてそんな物被るんですか?」

「だって、頭の上が光つてるのって恥ずかしくない?」

「そうですか?」

いや、だつてねえ。頭光つてると毛根に不自由しているみたいじゃ
ない。

そんなこんなで聖君を連れてこのマンションの最上階・18階に住
む“あの人”のもとへ向かう。

「その人は私にVRMMORPGを教えてくれた人で、私の大学の
先輩なの」

移動しながら簡単に説明をする。

「かなり優秀な人らしいんだけど、変わり者だから」

「だから不本意なんですね」

「まあ、悪い人ではないんだけどね」

話しているうちにあつという間に18階につく。3階しか離れてい
ないのだから当然か……。

呼び鈴を鳴らす事に一瞬ためらつも、すぐに鳴らす。すると僅か数
秒で扉が勢いよく開いた。

「ちょっと先輩…いきなり開くとビックリするじゃないですか

……」

抗議の声を上げるが目の前の人物を見てしだいに声が小さくなつた。
目の前にいたのは小鬼だ。身長は私の腰くらいまでしかなく、耳が
エルフほどではないがとがつている。腕は長く床についており、お
でこのちょっと上のあたりで黒髪の間から小さな角がのぞいている。

「お前の事だからそろそろ来ると思つていた。それと、そいつは誰
だ？」

目の前の小鬼が私に向かつて話しかけると、私の背後を覗き込むように身体を傾ける。

「あの梅森先輩ですよね……」

質問ではない。確認だ。なんせ顔が普段とまったく同じだからだ。

「そうだ」

黒縁眼鏡を押し上げながら即答する。

はい、確認とれました。この人、ゲームでも自分と同じ容姿設定にするから分かり易い。

「え～と、この子は私の隣に住んでる竹山たけやま聖君ひじりで……」

「いつまでも立っているのもなんだろう。とにかく入れ

最後まで聞くことなく、スタスターと奥に引っ込む小鬼。おのれ、自分から聞いておいて聞かずに戻るとは……。

「ふつ、ふふふふ……」

「ど、とうあえずお邪魔しましょうよ」

私は聖君に押されるよつに中に入つていぐ。中の様子を見た聖君は驚嘆する。

ガラス製のテーブル板に銀色のパイプ足。黒いリクライニングソファ。オシャレな本棚。部屋を彩る観葉植物。きちんと整理され無駄がない。

「おお～、なんか出来る男の部屋つて感じがしますね
まあ事実、先輩は出来る男なんだけど。料理をはじめとした家事全般はもちろん、勉強だって学年で1・2を争うほどの秀才だから。

ただ、生糀のゲーマーで変人だけだ。

「適当に座つてくれ」

聖君がリビングを見渡しているとキッチンからお盆に紅茶を載せた、梅森先輩が出てくる。

私たちは並んでソファーに腰掛け、先輩は向かい側に座る。

「では改めて、私は梅森うめもり仁じん。真里亜マリナと同じ大学の3年生だ。外見は小さい鬼人族。さしづめ小鬼コジンと言つたところか」

先輩が聖君に軽く自己紹介をする。

「あ、はじめまして。竹山 聖、エルフです。よろしくお願ひします」

聖君も簡単に挨拶をする。

「でも、いいんですか？僕までお邪魔して」

「ああ、真里亜が連れて來たというのであれば何の問題も無い」

あれ？意外と信頼されてる？

「あーもしかして2人は恋人同士なんですか？」

先輩の返答から何か気付いた様な顔になつた後、いきなりこいつ言つた。

「違うからー断じて違うからーちよつとー『そんな分かつてまわよ
みたいな顔しないでー』」

私が否定するが、聖君は照れ隠しだとでも思つてゐるらしい。

「確かに長い付き合いだけれども、別に付き合つてないからー。
「ふむ、確かに。かれこれ5年になるか。まあ、ほとんど遊びの付
き合ひだがな（ゲーム的な意味で）」

それを聞くと……

「お、大人の付き合いですか。分かります」

「間違つてるよー！ ていうかそんな不純な関係を理解するなあー！」

はあ、はあ。駄目だー！ のままではシッコリ！ という激しく体力を消
耗するポジションになってしまつ。

「落ち着け真里亞。話があるんじゃないのか？」

そうだつた。危つゝ目的を忘れるところだつた。

「はー。先輩なら私達より詳しく今の状況を理解しているかと思つ
て」

「なるほどな」

先輩は紅茶を一口飲むとこう切り出した。

「そうだな……。2人は“THE ABSORPTION OF
WORLD”のサイトが繋がっているのは知つている
か？」

「はい。お互いの倉庫を確認しただけですけど」

「そうか。ちょうど私も確認作業をしていたところだ。どうせだから一緒にやるわ」

梅森先輩は立ち上がるトリビングから通ずる扉の一つを開ける。その部屋は先輩の特別製で、壁一面が一つのスクリーンになつてそれ用のスピーカーまで付いている。元々は映画の鑑賞用だったそうだが、今ではゲームにも使つてているらしい。正直、やり過ぎだと思うが大迫力になるためPCの小さい画面よりもずっと面白い。聖君は口をあんぐりと開けているが、私は慣れたものでスクリーンの正面にある複数人用のソファーライフの先輩の隣に腰掛ける。それを見て聖君も私の隣に慌てて腰掛ける。

「そうだな。まずは私の倉庫内のアイテムは……」

【倉庫】

銅の短剣 × 1

「普通ですね」

「まあ、最初だからな」

「僕の場合は引いたけど、これってランダム何ですかね?」

「どうだろうな。確かに武器選択画面など無かつたが……」

これなら普通に台所から包丁持つてこればいいのではないかと思つたのは私だけ?

「そう言えば何故、真里亜は私服なのだ?」

「あ~、えっとこれはサービス特典で……」

「なんだ。人間ではないのか?」

そう。私の姿は輪っかと羽を隠せば人間にしか見えない。私が帽子を脱ぐと今まで隠れていた天使の輪が露になる。

「なるほど、天使か。お前らしいな」

「あれ？ そう言えば、どうして先輩はこの姿の私を見て私だと気づいたんですか？」

「正確にはお前の姿で判断したわけじゃない。このマンションの周囲には森しかなく、私たち以外の存在、少なくとも人間且つ私の知り合いがいるとは思えない。そして、このマンション内で俺を訪ねて来るような奴はお前しかいない」

アンタ友達いないのか。まず、そう思つたが口にはしない。
しかし……。

「もしかして友達いないんですか？」

「いた！ 勇気と蛮勇を履き違えるバカがここにー！」

「はつはつは。まあ少なくともこのマンション内に友人と呼べるものはいないな」

まあ、ある程度親密になると面倒見の良さが分かつて来るんだけどね。

その後、もう一度画面に向き直る。

「ふむ。どうやら個人に関するものは倉庫しかないようだな」

「真里亜さんの倉庫は空、僕の倉庫には弓矢、梅森さんの倉庫には銅の短剣。あんまりパツとしませんね」

「まあそう言つた。さて次はこの世界の情報だな」

そう。この情報が一番大事になつて来る。今後の私たちの行動方針が決まるのだから。

まず、種族について分かつた事。これは私たちが今までプレイしてきた物とほとんど変わらない。ただ、私たちがゲームのキャラクターの姿をしているが実際に生きているという事。これが如実に表れる部分があった。繁殖力だ。高い順に人間、獣人、ドワーフ、鬼人、エルフらしい。また、繁殖力と寿命は反比例するらしい。

分かつたのはプレイヤーが選択すると思われる、この5種族だけ。残念ながら天使やモンスターなどの情報は一切なし。こんちくしょう！

その次に分かつたのがこの世界は完全スキル制だと言う事。

つまりレバではなく、装備やスキルによって能力が決まると言う事だ。そしてスキルにはレバがあり最大で10であること。強くなつたり上手くなつたりするためには、訓練や練習を必要とする。つまりは現実と同じように練習しろと言つ事らしい。

そして魔力。これは生まれた時に保有量が決まつていて、どれだけ訓練しても増えないらしい。例外はアイテムや装備品での強化。私たちの場合はキャラクタークリエイトの時に知らず知らずのうちに決まつていたらしい。

うん。ゲーム内での私たちの能力は分かつた。いや、訂正。個人データは無かつた……。

問題はこれがゲームではなく現実であるという事。ゲームなら死んでも蘇る事が出来るけど、ここではどうか分からぬ。蘇生の魔法があるかもしれないけど、それを使える状況でなければ本当に死ぬかもしれない。そもそもそんな魔法があるかどうかも分からない。ああ、もう嫌だ。こんな世界でどうやって生きるの。帰りたい。で

も「こじが帰る家だし。どこに帰るの?お母さん……。
駄目だ。どんどん気分が暗くなる。ああ、涙も出て来た……。

すると……

「真里亜さん、元気出してください!」

「グスッ。ほえ?」

「映画やアニメだと主人公はこんな時前向きに考えますよ。じゃないと、ストーリーが進みません」

何を言つてゐるんだこの子は?

「聖の言ひとおりだ。何か行動しなければ事態は好転しない。心配するな私たちがついている」

先輩も……

「そんなセリフ恥ずかしくないんですか?」

「何を言ひ。映画では定番じゃないか」

梅森先輩が眼鏡をクイッと押し上げる。そんな様子がおかしくて……
クスツ

「でも、そうですね。おかげで少し元気になりました」

「そうですよ。真里亜さんは笑顔が一番似合つてますよ」

となりで聖君がサムズアップをしている。ていうか……。

「あれ~もしかして口説かれてる?」

「えつ~いや、別にそんなつもりでは……」

何だかアタフタしだした。『ううううううが可愛いんだよなあ』。

「ふふ、冗談よ。ありがとね」

思わず彼の頭を撫でる。が余計にアタフタしてしまった。

「和んでるところ悪いが、今後の方針を考えたいのだが」

隣から先輩の声が……。

「あはは、」めんなさい

「まず最大の問題は食糧だろう。帰れる帰れないは別として、水も食料も2・3日は大丈夫だがそれ以上となると調達していくしかない」

「そうですね。水に関しては、幸い森の中だから近くに川があるでしょうし、食べ物も探せば見つかるかも」

「そうだな。楽観する程でもないが、悲観する程の状況でもない。後は役割分担だな。下階の住民とも協力し、水・食糧の確保、周囲の搜索、炊事まだまだ挙げればきりがない」

そこまで言つと聖君が何かに気づいた様で

「僕達はキャラクリエイトしましたけど、それ以外の人はどうなつ

てるんでしょうか？ わつき見たかぎりだとエルフとか獣人とか色々いましたけど」

「学生多いもんね～。みんなそんなにネトゲ好きなのかな？ その問い合わせ先輩が答える。

「それなら既に調べた。種族は人間、装備無し、容姿はそのままで魔力やスキルに関しては我々と同じだ」

「そ、そうですか……」

「いつ調べたの！？」

「朝5時に起きてからすぐにな

心を読まれた！？」

「さて、それでは下階の住人とも話をつけなければな

先輩は立ち上がり、身支度を始める。

ああ～私は何の当番だろ～。やっぱり炊事や洗濯かな～。
なんて考えていると先輩に声をかけられた。

「真里亞。出来れば天使である事は隠しておくんだ

「なんですか？」

不思議に思い首をかしげる。

「おお、意外と可愛いしぐさをするな

「ば、馬鹿な事言つてないで理由教えてくださいー。」

ジト田をするが先輩には効果なし。

「お前のサービス特典の事を知れば、羨み、妬む奴らが出てくる可能性があるからだ」

そういえば聖君も羨ましそうだったな~。

「見てこらるつちはいい。だがこちらに危害を加えてくる可能性もある。この様な状況下で余計ないぞ! されば避けるんだ。聖君もいいかな?」

「はい! 誰にも言いません!」

「うん。では行くか」

第3話「エルフの失くしたモノ」

部屋を出た後の梅森先輩はすぐに、マンション一階にある、管理人さんの部屋に向かつた。このマンションにある放送設備を借りて、今後の予定案を放送するためだ。

このマンションは全部で187世帯の人々が住んでいる。

6割が学生で4割が社会人。学生の3割が大学生で7割が高校生。社会人の5割は家族で住んでいて多くが3人暮らし、残りは一人暮らし。

（男女比は半々。家族世帯は両親と小学生程の子どもである。）

要するに、高校生・78人、大学生・34人、社会人（一人）・37人、家族暮らし・114人、合計・263人。

これだけの数の人がここに住んでいる。先輩はこの人たちを体力や知識などを考慮し、補給班・生活班の二つに大きく分類。

補給班は周辺の探索、飲料水や食料の調達が主な仕事だ。

生活班は主に炊事を担当する。263人分の生活物資の管理・計算をする。

この2班を役割ごとにさらに細分化し、各々リーダー及びサブリーダーを選出し事に当たる。

先輩はこれらの説明を放送し終えると、『自身や周囲の判断で補給班、生活班に分かれてくれ』と言い残し、放送を終了した。

最初私は、皆が指示に従つてくれるかどうか心配だったけどそれは杞憂に終わった。

管理人室から出て中庭から上を見上げると、住人がそれぞれの班の指定された集合場所にぞろぞろと移動していくのが見えた。

この時私は先輩のカリスマ性に驚いていた。ただの変人じゃなかつた。カリスマ的な変人だった。

「真里亞さんはどっちの班に行くんですか？」

「私は生活班かな～。料理ならそれなりに出来るから」

「僕も生活班じゃ駄目ですかね？」

「料理出来るの？今ある食料で今後どうやってやりくりしていくか、考えないといけないよ。栄養バランスや一食の配分とか。それに聖君男の子でしょ。体力のある人手が多いに越した事は無いんだから、補給班の方がいいと思うけど」

「…………じゃあ補給班でいいです」

「頑張れ！男の子！」

その後、補給班の集合場所に移動する聖君を見送つてから自分も集合場所に移動するべく足を動かす。

僕は真里亞さんと別れ、梅森さんと一緒に実働班の集合場所に指定した一階のエントランスホールに移動した。一階は上の階よりもずっと大きく橿円の形をしていて、管理人室や郵便受、別館にある駐車場へと続く通路などがある。

「はあ～」

思わずため息が出る。“真里亜さんと一緒にいたい”とさり気なくアピールしたが普通にスルされてしまった。やっぱり年下だからなのか、年上じゃなきゃダメなのか？

「おまえ、真里亜に惚れているのか？」

「のわあーーー？」

考え込んでいたら、梅森さんの心を読んだかのような発言に変な声を出してしまう。

「い、いきなり何を言つてるんですか！」

「違うのか？」

「違いますよ！確かに好きですけど、そういうのじゃなくて憧れと言つた何と言つた……」

最後の方は小声でボソボソ言つており良くなき取れない。

「そうか。それは野暮なことを聞いたな」

「そうですよ。ビックリしたじゃないですか」

「ふむ。あいつは引き籠もつてさえいなければ彼氏の一人や一人はいてもおかしくは無いからな」

「そ、そう何ですか！？」

「ああ、愛嬌のある容姿に人当たりの良い性格、気配りもできる。人から好かれる要素は持っているだろう。まあ今は、あいつがいつも様に気合を入れて創ったアバターの姿をしているがな」

普通に考えれば氣づくであろう事に今まで氣づかなかつたバカ一人。自分と同じく引き籠もり気味な真里亜を、容姿は普通でまったくもてない自分と重ねていたのが悪かつた。

高校生になつてここに引っ越してきた日に真里亜に出会い、
勉強を教えてもらつたり、MMORPGという同じ趣味があつたと
分かつたりして。

偶に「ご飯を」駆走になつたりしてこらへん、「気づいたら好きになつていた。

この時期にありがちな年上女性への憧れなのかも知れないが…

そういうえばこの身体もあの時、いつもMMORPGと時と同じ様に、いくつもある設定を決めてこのエルフを創つて……
やっぱリゲームのキャラの格好してるから、ここはゲームの中なんか?

そういうえば、どこかの国の人とかって会社がVRとかいう技術を開発してるってネットに書いてあつたな。

これがそなうのか? ゆうか、寝てる間にどうやって?
よく漫画や小説なんかにトリップ物があるけどそれなのか?
だけど、マンショング」と飛ばされるなんてあつたか?

ああ、分からん。こういうのは賢い人に任せよう。

そんな事を考へている間に、それなりの人数が集まつてきた。

主に男性、時々女性。多くがエルフや獣人、人間でドワーフは少ない。

既婚者はそうでもないが一人暮らしは大概姿が変わつてこる。
どうなつているんだ此処の住人?

梅森先輩は集まつて来た人達の中で、外見が変わつてしまつていて
人達から本名を聞き出し、名簿に記入している。
それが終わると皆の前に出て

「うむ。此處に集まつてくれた皆には感謝しよう。さつきも説明し

たが現状を理解しているものはいないだろつ。私も分からん

ですね~

逆に分かってたらそれはそれでビックリするけど……

「水や食料は数日分しかない。このまま現状の改善が見られなければ、我々は餓死する!」

でしょうね……

「そこで何よりもまず水及び食料の確保が優先になつて来る。混乱している者もいると思う。しかし現状の調査をするためにはまず、生きねばならない!」

アナタ、普段何してるんですか?

「そこで此処に集まつてもうつた顔で、協力してそれらの捜索・補給をしたいと思つ」

「いいぞ、チビツ!」

「協力します!」

「分かりました」

「つーか。お前誰だよ!」

「どこにあるんでしょうね

梅森さんの声明に対してもうたくさんの言葉が出てくる。

一部ガラの悪い人がいたが気にしない。

「それでは3～4人のグループを作り私に報告してくれ。30分で準備したのち、隨時出発する。その際、車を持つている者はなるべ

く固まらないようにしてくれ。木々の間にかなりの余裕があるからな、移動は車の方がいいだろう。また、周囲にどんな危険が存在するか分からぬ。各自細心の注意を払ってくれ。遅くとも12時には此処に集合するように。以上

それを聞いた住人は、細かい質問のある者を除き各々グループを決め、自室に準備のために戻つて行つた。

そういう僕は梅森さんと同じグループになる事が決まつていたので、質問の受け答えをしている梅森さんが解放されるまでは『ステイ』だ。

「ひ～じ～り～く～ん」

そんな時、後ろの方から僕を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると超絶金髪美女が僕を探し歩いていた。

「誰！」

腰まで届く太陽の如き暖かさを感じるブロンンド。

身体の半分以上ではないかと思える、長くスラッシュと伸びた足。自分と同じ麻の様な服を身にまとい、その存在を全力全開でアピールする母性の塊。

長くとがつた耳を持つ美人。^{エルフ}

エルフの知り合いなんていないのでアバターなのだろうが自分の事を『ひ～じ～り～く～ん』などと呼ぶほど仲の良い女性は聖にはいられない。

真里亜がいるが、彼女は銀髪天使だ。

さあ、どうする？

思い切って話しかけるか……。

でも彼女い年齢歴＝年齢の僕に女性に話しかけると？
でも、向こうは僕の事を探しているみたいだし……。
一体どうすれば……

「ああ、聖ならじやこじるね」

「どうですか。ありがとうございます」

ＺＯ〇〇〇〇〇〇！

梅森さん何やつてるんですか！

うわっ！こっち来た！

まだ心の準備が～！

「ここにまじめ。あーまだおはよつの時間だつたね」

「おおおお、おはよつじやいます！」

「ふふ……。そんなに緊張しないで。リラックス、リラックス！」

「は、はい。あの……僕を探してみたみたいですが、どなたですか？」

「え～分かんないの～。それに、探してりゅうて分かつて声を掛けてくれないなんて。聖君つて結構鬼畜？」

「えつ～あ、えつと。ごめんなさい」

僕が頭を上げると、エルフのお姉さんの顔には笑顔が無かった。

次第に眉間に皺しわがより、今にも吐きそつたほど顔が青い。

「大丈夫ですか！？」

あまりにも急な変化にどうすれば良いか分からず、うろたえる。

「やべつ……やつてもうつのは良いのに、自分でやるとか……しかも男に……ないわ」

「はい？」

突然訳の分からぬ事を口走つたお姉さんに、思わずアホな声を出す。

「分かんねえのか？俺だよ、柳原 光だ」
「は？」

酷く気分の悪そうな顔で告げる。

柳原 光？それはこのマンショ内と同じ高校に通う唯一の友人の名前だ。

この人が光？

までよ……。確かに光は『なんでゲームの中でも男の顔を見なくちゃいけないんだ！』などと、常田のから言つていてアバターは大概女キャラの…………。

「オマエ。何やつてんだ……」
「やつと気づいたが。ほら、オマエを脅かそうとして……」
「脅かそうとして？」
「何か大切なモノを失つたところだ」
「は？」
「聖もやれば分かる。そしてさつきのをテフォルトでやつているお姉さんを敬え！」
「誰がするか！あんな事！」

間違いない。声が女人みたいになつてゐるが紛れもなく光だ。
お姉さんフェチの光だ。

「光はいつものように女キヤラか……」

「おう。ビックリしたぞ、起きたら巨乳美人になつてたんだからな」

腰に手を当て得意げにカラカラと笑う。
それで、微塵も驚かなければ称賛に値するよ。とか何とか思つてい
ると背後から梅森さんが現れた。どうやら質問タイムは終わつたよ
うだ。

「すまない、待たせたな」

「いえ、気にしないでください。それで僕らは誰と同じグループに
なんですか？」

「残つているのは私たち3人だけだ。よつて必然的に我々で1グル
ープだ」

辺りを見回すと確かに僕ら以外誰もいなかつた。
変に知らない人と同じになるよりはいいか。と思ったが梅森さんも
数時間前まで赤の他人である事を思い出す。

「貴方はさつきの小さい人！」

光が驚いたように見降ろす。倍近い身長差があるので仕方がな
いが……。

「自己紹介が遅れたか。私は梅森 仁という。よろしく頼む、柳原
光君」

「何で名前を！エスパーですか！？」

今度は大きく目を見開いて見降ろしている。
さつき名簿にチェックされてただる。というシッコリは心の中にし
まっておく。

「こいつはバカなので、一々相手をしていたら疲れるのだ。

ていうか、梅森さんも『ふつ』みたいな顔してないで否定してくださいよ。

「あの～それで僕らはこれからどうすれば？」

「ふむ。私たちの中で車の運転が可能な者がいない。よって運転手のスカウトに向かつ」

たしかに僕と光は免許も車も無いし。梅森さんは車はあるらしいけどこの体型^{サイズ}じゃね。

「誰か心当たりでもあるんですか？」

「うだうと良くなと思いつつ尋ねてみる。

「何人かいるが、まずは真里亜だな。真里亜なら免許も車も持っているからな」

そつ^{あと}言つと梅森さんはそそくかとエレベーターの方に歩きだした。
その後^{あと}を光と共に追おつとするが、不意に光に呼び止められる。

「何だよ？」

「真里亜って誰だ？」

「誰つて……」

ああ言つたら叫びそうだな。と思いつつも教える。

「光の大好きなお姉さんだよ」

その後、『キター』と叫ぶ女エルフが確認されたとか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2802w/>

インドア天使

2011年10月9日15時55分発行